

# 新規採用・削除医薬品等通知

薬剤部 医薬品情報管理係

## 削除医薬品通知

●6月1日より

ジェイゾロフト錠 25 mg 6/1 削除

ソルコセリル軟膏 6/1 削除

サンピロ点眼液 3% 5mL 6/1 削除

## 医薬品規格追加通知

### 今回採用医薬品

●6月1日より

献血グロベニン-I 静注用 5000 mg

サンピロ点眼液 2% 5mL

## 医薬品変更通知

### 今回採用医薬品（採用）

●6月1日より

ジェイゾロフト OD 錠 25 mg

●6月2日より

オメプラゾール注射用 20 mg 「日医工」

### 従来採用医薬品（削除）

ジェイゾロフト錠 25 mg

オメプラール注 20 mg

## 適応追加通知

イリボー錠 5 $\mu$ g	<p>【効能・効果】 <b>男性における</b>下痢型過敏性腸症候群</p> <p>【用法・用量】 <b>男性における下痢型過敏性腸症候群</b> 通常、成人男性にはラモセトロン塩酸塩として5<math>\mu</math>gを1日1回経口投与する。 なお、症状により適宜増減するが、1日最高投与量は10<math>\mu</math>gまでとする。</p> <p><b>女性における下痢型過敏性腸症候群</b> 通常、成人女性にはラモセトロン塩酸塩として2.5<math>\mu</math>gを1日1回経口投与する。 なお、効果不十分の場合には増量することができるが、1日最高投与量は5<math>\mu</math>gまでとする。</p>
サインバルタカプセル 20 mg	<p>【効能・効果】</p> <ol style="list-style-type: none"><li>うつ病・うつ状態</li><li>糖尿病性神経障害に伴う疼痛</li><li><b>線維筋痛症に伴う疼痛</b></li></ol> <p>【用法・用量】</p> <ol style="list-style-type: none"><li><b>うつ病・うつ状態、糖尿病性神経障害に伴う疼痛</b> 通常、成人には1日1回朝食、デュロキセチンとして40mgを経口投与する。投与は1日20mgより開始し、1週間以上の間隔を空けて1日用量として20mgずつ増量する。 なお、効果不十分な場合には、1日60mgまで増量することができる。</li><li><b>線維筋痛症に伴う疼痛</b> 通常、成人には1日1回朝食後、デュロキセチンとして60mgを経口投与する。投与は1日20mgより開始し、1週間以上の間隔を空けて1日用量として20mgずつ増量する。</li></ol>
ジフルカンカプセル 100 mg	<p>【効能・効果】 カンジダ属及びクリプトコッカス属による下記感染症 真菌血症、呼吸器真菌症、消化管真菌症、尿路真菌症、真菌髄膜炎 造血幹細胞移植患者における深在性真菌症の予防</p> <p><b>カンジダ属に起因する膣炎及び外陰膣炎</b></p> <p>【用法・用量】 <b>カンジダ属に起因する膣炎及び外陰膣炎</b> 通常、成人にはフルコナゾールとして150mgを1回経口投与する。</p>
タリオン錠 10 mg	<p>【効能・効果】</p> <p><b>&lt;成人&gt;</b> アレルギー性鼻炎、蕁麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、痒疹、皮膚そう痒症)</p> <p><b>&lt;小児&gt;</b> <b>アレルギー性鼻炎、蕁麻疹、皮膚疾患(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症)に伴うそう痒</b></p> <p>【用法・用量】</p> <p><b>&lt;成人&gt;</b> 通常、成人にはベポタスチンベシル酸塩として1回10mgを1日2回経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。</p> <p><b>&lt;小児&gt;</b> 通常、7歳以上の小児にはベポタスチンベシル酸塩として1回10mgを1日2回経口投与する。</p>
レミッチカプセル 2.5 $\mu$ g	<p>【効能・効果】 次の患者におけるそう痒症の改善(既存治療で効果不十分な場合に限る) 血液透析患者、<b>慢性肝疾患患者</b></p>

ソル・コーテフ注射用 100 mg

【効能・効果】

1. 内科・小児科領域

(1)、(2) 省略

(3) アレルギー性疾患

**気管支喘息〔10〕、14〕**、アナフィラキシーショック〔1〕、2〕、喘息性気管支炎（小児喘息性気管支炎を含む）〔\*3〕、10〕、薬剤その他の化学的物質によるアレルギー・中毒（薬疹、中毒疹を含む）〔\*1〕、\*2〕、\*3〕、蕁麻疹（慢性例を除く）（重症例に限る）〔\*2〕、\*3〕

(4)～(9) 省略

注I: 投与方法

1) 静脈内注射

2) 点滴静脈内注射

3) 筋肉内注射

4) 関節腔内注射

5) 軟組織内注射

6) 硬膜外注射

7) 腹腔内注入

8) 注腸

9) 結膜下注射

10) ネブライザー

11) 鼻腔内注入

12) 喉頭・気管注入

13) 食道注入

14) **静脈内注射又は点滴静脈内注射**

注II: 省略(\*印)

【用法・用量】

○ **通常、成人における用法・用量**（ヒドロコルチゾンとして）は**下記**のとおりである。なお、年齢、症状により適宜増減する。

1) 静脈内注射

1回の用量(mg): 50～100

1日投与回数: 1～4

緊急時1回用量(mg): 100～200

2) 点滴静脈内注射

1回の用量(mg): 50～100

1日投与回数: 1～4

緊急時1回用量(mg): 100～200

3) 筋肉内注射

1回の用量(mg): 50～100

1日投与回数: 1～4

緊急時1回用量(mg): 100～200

4) 関節腔内注射

1回の用量(mg): 5～25

1日投与回数: 投与間隔2週以上

緊急時1回用量(mg): —

5) 軟組織内注射

1回の用量(mg): 12.5～25

1日投与回数: 投与間隔2週以上

緊急時1回用量(mg): —

6) 硬膜外注射

1回の用量(mg): 12.5～50

1日投与回数: 投与間隔2週以上

緊急時1回用量(mg): —

7) 腹腔内注入

1回の用量(mg): 40

1日投与回数: —

緊急時1回用量(mg): —

8) 注腸

1回の用量(mg): 50～100

1日投与回数: —

緊急時1回用量(mg): —

9)結膜下注射

1回の用量(mg):20~50mg/mL溶液 0.2~0.5mL

1日投与回数:—

緊急時1回用量(mg):—

10)ネブライザー

1回の用量(mg):10~15

1日投与回数:1~3

緊急時1回用量(mg):—

11)鼻腔内注入

1回の用量(mg):10~15

1日投与回数:1~3

緊急時1回用量(mg):—

12)喉頭・気管注入

1回の用量(mg):10~15

1日投与回数:1~3

緊急時1回用量(mg):—

13)食道注入

1回の用量(mg):25

1日投与回数:—

緊急時1回用量(mg):—

○気管支喘息(14)における静脈内注射又は点滴静脈内注射の用法・用量(ヒドロコルチゾンとして)は以下のとおりである。

(1)通常、成人には、ヒドロコルチゾンとして初回投与量100~500mgを緩徐に静脈内注射又は点滴静脈内注射する。症状が改善しない場合には、1回50~200mgを4~6時間毎に緩徐に追加投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

(2)通常、2歳以上の小児には、ヒドロコルチゾンとして初回投与量5~7mg/kgを緩徐に静脈内注射又は点滴静脈内注射する。症状が改善しない場合には、1回5~7mg/kgを6時間毎に緩徐に追加投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

(3)通常、2歳未満の小児には、ヒドロコルチゾンとして初回投与量5mg/kgを緩徐に静脈内注射又は点滴静脈内注射する。症状が改善しない場合には、1回5mg/kgを6~8時間毎に緩徐に追加投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

ソル・コーテフ静注用 500 mg

【効能・効果】

[ソル・コーテフ静注用 250mg、500mg、1000mg]

急性循環不全(出血性ショック、外傷性ショック)及びショック様状態における救急

[ソル・コーテフ静注用 250mg、500mg]

気管支喘息

【用法・用量】

[ソル・コーテフ静注用 250mg、500mg、1000mg]

急性循環不全(出血性ショック、外傷性ショック)及びショック様状態における救急

通常、ヒドロコルチゾンとして1回 250~1000mg を緩徐に静注又は点滴静注する。なお、症状が改善しない場合には、適宜追加投与する。

[ソル・コーテフ静注用 250mg、500mg]

気管支喘息

1)通常、成人には、ヒドロコルチゾンとして初回投与量 100~500mg を緩徐に静脈内注射又は点滴静脈内注射する。症状が改善しない場合には、1回 50~200mg を 4~6時間毎に緩徐に追加投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

2)通常、2歳以上の小児には、ヒドロコルチゾンとして初回投与量 5~7mg/kg を緩徐に静脈内注射又は点滴静脈内注射する。症状が改善しない場合には、1回 5~7mg/kg を 6時間毎に緩徐に追加投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

3)通常、2歳未満の小児には、ヒドロコルチゾンとして初回投与量 5mg/kg を緩徐に静脈内注射又は点滴静脈内注射する。症状が改善しない場合には、1回 5mg/kg を 6~8時間毎に緩徐に追加投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

ペグイントロン皮下注用 50 µg/0.5mL 用

ペグイントロン皮下注用 100 µg/0.5mL 用

【効能・効果】

1.リバビリンとの併用による次のいずれかのC型慢性肝炎におけるウイルス血症の改善

(1)血中HCV RNA量が高値の患者

(2)インターフェロン製剤単独療法で無効の患者又はインターフェロン製剤単独療法後再燃した患者

2.リバビリンとの併用によるC型代償性肝硬変におけるウイルス血症の改善

3.悪性黒色腫における術後補助療法

**【用法・用量】**

**[C型慢性肝炎及びC型代償性肝硬変]**

(1)リバビリンとの併用によるC型慢性肝炎におけるウイルス血症の改善の場合  
リバビリンと併用すること。

通常、成人には、ペグインターフェロン アルファ-2b(遺伝子組換え)として1回  
1.5  $\mu\text{g}/\text{kg}$ を週1回皮下投与する。

本剤の投与に際しては、患者の状態を考慮し、減量、中止等の適切な処置を行うこと。

(2)リバビリンとの併用によるC型代償性肝硬変におけるウイルス血症の改善の場合  
リバビリンと併用すること。

通常、成人には、ペグインターフェロン アルファ-2b(遺伝子組換え)として1回  
1.0  $\mu\text{g}/\text{kg}$ を週1回皮下投与する。

本剤の投与に際しては、患者の状態を考慮し、減量、中止等の適切な処置を行うこと。

**[悪性黒色腫]**

通常、成人には、ペグインターフェロン アルファ-2b(遺伝子組換え)として、8週目までは1回6  $\mu\text{g}/\text{kg}$ を週1回、9週目以降は1回3  $\mu\text{g}/\text{kg}$ を週1回、皮下投与する。本剤の投与に際しては、患者の状態を考慮し、減量、中止等の適切な処置を行うこと。